

157 (1941).

Nom. Jap. Hosobano-mansyû-hanaudo.

Distr. Manshuria, Korea & China bor.

3. ウスバキクボクチ

Klasea glauca (Ledebour) Kitagawa in Journ. Jap. Bot. 21: 139 (1947).

Serratula glauca Ledebour in Mém. Acad. Sci. St.-Pét. 5: 560 (1814), non Linnaeus (1753).

S. marginata Tausch in Flora 11-31: 484 (1828).

S. Laxmanni Fischer ex De Candolle, Prodr. 6: 669 (1837).

S. nitida (Waldstein & Kitaibel) Besser var. *glauca* (Ledebour) Trautvetter in Bull. Soc. Nat. Mosc. 39-2: 379 (1866).

K. Laxmanni (Fischer) Kitagawa, l.c. 25: 40 (1950).

K. marginata (Tausch) Kitagawa, l.c. 40: 137 (1965).

Nom. Jap. Usuba-kikubokuti.

Distr. Asia centr., Sibiria, Mongolia & Manshuria bor.-occid.

□木崎甲子郎編：琉球の自然史 282 pp. 1980. 築地書館. ¥2,400. 日本学術会議の第10期沖縄小委員会の活動の一つである。全部で15章、ほとんどすべてを沖縄在住の自然科学者の筆になったことは特筆に値する。まずはじめに日本列島の古地図9枚をもとに木崎、大城氏の文章が眼を引く。従来辺境の故に過顔視された西表や宮古島の有様が、近隣と共に大きくせまる。以下地形、気候を経て動植物の各類の分布の様相が、多くの専門家の手で述べられ、琉球の生物相を語る。植物は pp. 113-123 に初島住彦氏が「植物相の由来」を記している。言葉は割に少ないが、ホシザキジャクジョウソウ属とヤエヤマヤシ属の固有2属からはじめてじつによくまとまっている。今一つ、「農林業の歴史」として東清二氏の文章もその実相を伝えている。吉田朝啓氏の「ハブと人間」も、ハブと人間との戦いとして述べられている。近來にない良書である。慇を言えば、もう少し文献があげられるとよかったと泌々思う。(前川文夫)

□Igarashi, S.: **Food plants of Papilionidae** pls. 102. 1979. G. Igarashi, Tokyo. 五十嵐邁氏が苦心して蒐集、撮影をされたアゲハチョウ科の食草の写真集である。ウマノスズクサ科とミカン科を主にした10数科で、頁大に大きく、全姿、葉、花、果実などを掲げ説明に種名、産地、寄主の名及び性格の二三について記している。ギフチョウ、ヒメギフチョウの食草であるタマノカンアオイ、ランヨウアオイ、ウスバサイシン、オクエゾサイシン、フタバアオイが大きく出ていて光っている。*Aristolochia* は世界各地から集まったもの二十数種に及び、著者の経験による寄主の列記は大変参考になる。著者の書「世界のアゲハ蝶」からの別刷。(前川文夫)